

本美濃紙の歴史

現存する日本最古の紙は、岐阜県的美濃のものです。紀元 702 年の美濃の家系図に用いられており、古代の宝物や工芸品を収蔵する奈良県の正倉院に保管されています。麻や靱皮繊維を使用した製紙法は、中国から日本に伝わりました。紀元 720 年に書かれた日本書紀には、中国の製紙法は紀元 610 年に朝鮮半島の仏僧により日本に伝えられたと記されていますが、紙漉きの技術は恐らく、これよりもさらに前の 6 世紀半ばに仏教伝来とともに日本に渡ったと考えられています。

和紙の起源

麻は繊維に分解させることが難しかったため、楮（こうぞ）（カジノキ）やミツマタ（ジンチョウゲ科）、雁皮（アオガンピ属）といった植物を使う技法が現地で発展していきました。こうして楮（こうぞ）や雁皮（がんぴ）で作られた紙が、和紙と呼ばれるようになりました。和紙作りは、農家にとって、冬の時期にも収入につながるものでしたが、やがて地方の主要産業へと発展していきました。美濃和紙の作り方は 1300 年以上前からほとんど変わっておりません。

紙と税

和紙は米や塩などの生活用品とともに、税金の支払いにも使用されていました。そして、日本各地で仏教が広まる中、和紙の重要性は増していきました。美濃和紙は、奈良時代（710～794 年）

より経典の写経や家系図などの政府の記録に用いられました。美濃は、平安時代（794～1185年）以降、都である京都へのアクセスが良かったことによる恩恵を受けていました。

美濃和紙の需要拡大

12 世紀、神奈川県の大田に幕府が開かれると、美濃和紙は武士の間で慶事用の贈答品として普及しました。14 世紀から 16 世紀半ばにかけて美濃地方を治めた土岐家は、大矢田（現在の美濃市の一部）に紙市を開きました。紙市は月に 6 回開催され、そこで商人たちにより購入された美濃和紙が京都や大阪に売られていきました。

戦における美濃和紙

1600 年、美濃の北の山間部、飛騨地方を治めていた武将、金森長近（1524-1608）は、戦国時代末期の関ヶ原の戦いで徳川家康側について戦いました。徳川軍の決定的な勝利は 100 年も続いた日本の内戦と社会的混乱に終止符を打ち、徳川幕府のもと日本は統一されることとなりました。徳川家康が軍令を伝えるために使用した采配には、美濃和紙の短冊を房にしたものが用いられました。美濃和紙の里会館には、黒漆塗りの采配のレプリカが展示されています。美濃和紙は徳川幕府の御用紙となり、現地の職人たちは御紙漉屋を名乗ることが許され、諸役免除の証文を受けました。金森氏はその忠義が買われて美濃周辺の土地が与えられました。金森氏は、長良川の土手にある港を拡大し、紙産業の中心としてそこに町を築きました。

未来を守る

第二次世界大戦後、美濃和紙は印刷機や洋紙に押され、衰退していきました。生活様式が変わり、提灯や障子といった日常品向けの和紙市場は消えていきました。21 世紀の現在、美濃和紙は、主に伝統工芸品や修復作業に用いられています。1,000 年前から同じ手法で紙を制作する職人の数は、19 世紀末の数千人から現在ではほんの一握りの数にまで減少しました。現地の取り組みにより、美濃和紙の製法は日本の工芸遺産の一部として維持されています。2014 年、美濃の手漉き和紙の製法は、ユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に追加されました。